

ラジオ放送
＜令和4年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.438

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送 良いことがいっぱい page 1
金光教教務総長 岩崎道與
- 喘息と親の祈り（信心ライブ） page 5
- アメリカで神様と出会った（信心ライブ） page 9
- 人はみな限りある命を生きる page 13
愛知県・今池教会 浅野弓
- 誰が為に助ける page 17
兵庫県・姫路教会 竹部真幸
- 喜び100個書き出してみた page 21
神奈川県・横浜西教会 山田信二
- 「おどおど」を「わくわく」に page 26
-初めてののお菓子作り-
大阪府・大仁教会 岩崎繁之
- 入院生活のなかで page 31
大阪府・島之内教会 三矢田光
- 勇気をくれた言葉 page 35
大阪府・吹田教会 近藤加奈美
- 山茶花の咲く頃 page 39
福岡県・苅田教会 深見徳久
- 私の「性格改造計画」進行中（信心ライブ） page 43
- 失敗しても大丈夫（私からのメッセージ） page 47
静岡県・静岡教会 岩崎弥生
- 「ありがとう」っていいね page 51
(もう一度聞きたいあの話)

《年頭放送》

「良いことがいっぱい」

金光教教務総長 岩崎道興いわさきみちよ

皆様、明けましておめでとうございます。

一昨年から続く新型コロナウイルス感染症が、昨年も私たちにいろいろな影響を及ぼしました。そうした中でも、このように新しい年を迎えられたことを、まずはお慶び申し上げます。

そして、今年も大変な状況が続くかもしれません。だからこそ、「今年こそは良い年になりますように」と、お願いにも力が入ると思います。

さて、「信心すると、何か良いことがありますか」と尋ねられることがよくあります。

金光教のご信心をしているおばあさんと、小学生の男のお孫さんとの会話です。

「おばあちゃんは、よく教会にお参りするけど、信心すると何か良いことがあるの」と、ある日孫が聞いてきました。息子があまり信心に関心を持っていないことを気にしていたおばあちゃんは、息子を越えて孫に信心を伝えられるチャンスと違って、孫が信心する気になる答えを考えました。

「信心すると良いことがあるかって。あるよあるよ。信心するとね、勉強ができるようになるんだよ」

「ほんとに。信心したら勉強ができるようになるの」

「ああ、そうだよ。神様をお願いして勉強す

ると、やったことがしつかり身に付くようになるんだよ」

あまり勉強好きでない孫が信心に関心を持ってもらい、なおかつ勉強も好きになってくれたらと、おばあちゃんなりに考えての答えでした。すると孫は、

「ふ〜ん、そうか。信心すると勉強ができるようになるのか。だったら、お父さん、もっと信心すれば良かったのに」

思いがけない孫の言葉に大笑いをしたと、楽しい報告を聞かせてもらいました。

そうとして、「信心すると、何か良いことがありますか」と聞かれたら、私はこう答えます。「信心すると、今あなたが座っているその椅子、その椅子にお礼が言えるようになります」と。

そうなんです。信心をすると、椅子に座るという、その何でもないこと、当たり前のお礼が言えるようになるのです。椅子に座るのは当たり前のことですし、お礼を言うほどのことでもないかもしれません。でも、信心をする時、椅子にお礼が言いたくなってくるのです。毎日使う食卓の椅子や勉強机の椅子、あるいは電車で座った座席、たまたま腰を下ろしたベンチなど、立ち上がる時には思わず「ありがとうございます」とつぶやいてしまうのです。なぜでしょうか。

金光教では「お取次」ということを大切にしています。お取次とは、神様と私たち人間をつなぐ働きです。そして神様とつながることで、見えない神様のお働きや思いを感じるようになる

ります。ですから、お取次によって私たちは神様と出会うことになるのです。

そして、神様と出会い、神様の働きや思いを感じるようになると、その神様が私たちにいろいろなことをおして働きかけくださっていることが見えてきます。そうなんです。椅子に座るということも、神様のお働きかけによる出来事として見えてくるのです。

神様のお働きによって、私がこの椅子と出会い、こうしてそこに腰を下ろす機会が生まれた。そのつながりを気付かせてくれ、その不思議さを感じさせてくれるのが、信心の、金光教のお取次のお働きです。

そこに椅子があつて私が座つたという、目に見えていることだけではなく、そこに至る目に

見えない様々なお働きが重なり合つて、私は今、椅子に座っている。そうした椅子と自分とのつながりを感じ、そのつながりを結んでくれたお働き、すなわち神様のお働きにお礼をするのが、「信心をする」ということです。ですから、椅子にお礼を言うのは、「椅子に向かつて」ということだけではなく、「その椅子をおして神様にお礼をする」ということでもあります。

もうお分かりだと思えますが、このように椅子にお礼をするということは、他のことにも広がっていきます。食べ物や飲み物、着る物や住まいなど、「今まで当たり前と思つていたものへのお礼」と、「そのものとのつながりをもたらししてくれた神様へのお礼」が生まれてきます。いえ、それだけではありません。時には、うれ

しくないこと、ありがたくないことにもお礼が言えたりします。何かの問題に出会って、はじめて当たり前前のおかげがたさに気が付いたという経験は誰にでもあると思います。そうなる、その問題に、そしてその問題をとおしてお働きくださった神様にお礼の心が生まれてきます。こうなってくると、信心をすることで、身の回りにはお礼を言うこと、すなわち良いことが次々と生まれてきますし、良いことが次々と見付かってきます。

これが、「信心をすると、何か良いことがありますか」の、私の答えです。金光教の信心は、このようにして良いことを見付け、出会わせてくれる生き方へと導いてくれます。

そして、その出会いをもたらずキーワードが

「金光様」です。神様に心を向けるこの言葉を唱えることで、当たり前前のことへの、そして良くないことへの見え方が変わってきます。

皆さんの周りには、今年もいろいろなことが起きてくるでしょう。良いことばかりではなく、時には良くないことも起こってくるでしょう。そんな時こそ、私たちが唱える「金光様」というお言葉を唱えてみてください。そのことで今年一年、あなたが神様とつながり、当たり前前のごとくありがたいと思えるだけでなく、良くないことの中にある神様の働きが見えてきて、良いことに変わっていきますようにとお願いさせていただきます。

《信心ライブ》

「喘息と親の祈り」

おはようございます。今日は、岡山県の金光教本部で職員をしている金光清治さんが、平成24年1月29日にお話しされたものをお聴きいただきます。

私は、昭和43年3月1日の生まれで、44歳になります。小さい頃によくぜんそくが出ていました。特に夜、寝てから出ることが多くありました。体を横にして寝ていると呼吸がしづらくなります。それでしんどくなるので、布団の上で体を起こすわけです。そしてひと呼吸するたびに肩で息をするような感じになります。ぜ

んそくというのは、吐く息はいいんですけども、息を吸う時がえらい。しんどいんですね。それで「だいころ（台所へ）行こう。だいころ行こう」と言う私を、母がおんぶしてくれて台所に連れていってくれます。

夜中に2階からわざわざ1階に降りて、廊下を通って、薄暗い台所でおんぶしてもらっている風景をいまだに思い出します。

当時の様子を母に尋ねましたら、「1歳になる前からぜんそくが出ていた。とにかく寝たらえらくて起きとかんといけんから、台所へ行ったり、お父さんと交代で部屋の中をおんぶしたり抱っこしたりしていた」と話してくれました。

私が小学校3年生か4年生の頃だったと思います。ぜんそくの原因として、卵、そば殻、ほ

こりが駄目ということが分かりました。布団や家のほこりとかは、掃除して環境を変えればそれで済むわけです。問題は、卵です。シュークリームとかアイスとか、子どもが好きそうなお菓子には、だいたい入っています。

それまで普通に食べていた物が食べられなくなる。私はそういうのは好きなほうでした。他の兄弟は食べられるわけですね。4人兄弟の中で自分だけが食べられない。つらかったですね。

母によると、「卵焼きでも卵を切ったら包丁やまな板は全部洗う。天ぷらも卵を入れないものを別に作っていた。お菓子はこれは良いだろうという物にも卵白が入っていたりして、清治はおかきしか食べられなくて、他の子は普通のお菓子を食べるのにかわいそうだった」という

ことでした。

大学卒業後、平成4年の春から本教9人目の海外研修生として、アメリカのシカゴに行かせていただきました。中西部にあるイリノイ州のシカゴという所は、冬は本当に寒いんです。ということ、ぜんそくの発作が起きる可能性が高いということ。ですから、私も覚悟して、ぜんそくの吸入器をいくつか持っていきました。

渡米直後はパスポートに次いで大事にしなくてはいけないくらいの思いで、いつでもどこでも使えるようにと備えていました。

忘れもしません。平成4年の5月2日、いよいよ渡米するという日の朝、自宅の前で車に乗り込む時に、父がすごい勢いで私に握手をして

きました。これは私がそういうふう感じたという事ですけれども、そんなことがありました。

当時、金光町の私の家には両親と私と妹しかおらず、私が長期間いなくなると、6人家族なのに家族3人だけの生活になります。両親にすれば、大学で4年間家を離れ、卒業後戻ってきた息子がまた金光町を離れる。しかも、遠い遠いアメリカというところ。さらに寒いところに行く。ぜんそくのことを誰よりも心配する親としては、その心はいかばかりであつたらうかと思ひます。

しかしその時は、「今、アメリカへ行かせていただきたい。今お育てをいただきたい」という願ひが、23歳の私の中で強く固まつておりま

した。そして一年半の間、向こうにいさせていだきまして、この間にぜんそくが何度起きたかと言ひますと、一度も起きなかつたんです。

帰国して早々に、父が何度も、「清治はアメリカで一度もぜんそくが出なんだなあ」と言つていましたが、それを聞くたびに、「本当にそうだなあ。その通りだなあ」と思つて、どれだけ自分が祈られていたか改めて気付かせていだきまして、お礼を申し上げました。

帰国して一年以上経つたある時、「清治はアメリカで一度もぜんそくが出なんだなあ」と父が言ひました。

もう私は日本の生活のペースにまた戻りまして、ぜんそくのおかげを頂いたことをすっかり忘れておりました。

それくらい親様の祈りは深い、大きいということ。それくらいに強く、そして深い祈りを捧げてくださっていたんだなあと思わずにおれませんか。

そして、渡米する日の朝、自宅の前で車に乗り込む時に、父がすごい勢いで握手をしてもらった、その勢いというものに込められた思いというものは、どれほど深く、大きく、そして強いものがあつたのかなということが思われてなりません。

親の祈りの深さ・大きさに触れた時、「親様」と呼ばずにはおられなくなつたということなのでしようか。

祈られて祈る。支えられて支える。人が人と

して生きていく上でとても大切なことのように思わされました。



《信心ライブ》

「アメリカで神様と出会った」

おはようございます。

今日は、アメリカの金光教サクラメント教会の大矢^{おおよや}嘉^{よみす}さんが、令和3年6月に、福岡県北九州市で行われた金光教の集会でお話しされたものをお聞きいただきます。

大矢さんのお父さんの実家は、金光教を信仰していましたが、大矢さん自身は、金光教についてあまり知りませんでした。

大矢さんは、今から40年ほど前、アメリカの大学へ留学。そこで金光教と出会いました。

私は「金光」という名前を音としては聞いて

いました。しかし、どんな字を書くのか知りませんでした。アメリカで小さな教会の看板に「KONKO」とローマ字表記で書かれてありまして、「ひょっとして、これは父の実家の宗教ではなかるうか」と思いました。そして、そこで話を聞きましたら、ものすごい宗教だということとが分かりました。もう驚きの連続でした。

その中で一番驚いたのは「生神^{いきがみ}」ということでした。この発想は他にありません。「生きてる時に神にならずして、死んで神になれるか」。亡くなった偉い人を祭る神社は各地にあるのですが、金光教では、「生きている時に神になれる」と説いています。つまり、生きている私たちに神になれるのです。ものすごい教えなのですが、実際のところはどうかのと思うま

した。

その思いを払拭はらいつくしてくれたのは、アメリカで出会った若い金光教の先生でした。そして、その先生を私は生涯の師と仰ぐことになりました。

ある日、先生と話をしていた時のことでした。いろいろな留学生がいます、その中に裕福な家庭でワガママいっぱいになったらうなと思える人を見て、「バカは死ななきゃ治らない」とつぶやく私に、先生は、「それでも、その人のことを願わなきゃ」とおっしゃいました。「そんな神様みたいな」と笑う私に、間髪を入れず、「その神になるのが、このお道」と先生。素晴らしい切れ味の良い返し技。私は言葉を失いました。しばらくして、「人が神になるんですか」

と聞きますと、「教祖様がそうです。私の師匠もです。その稽古をしよるんよ。あなたも稽古しない？」とたたみかけるように言われました。圧倒されながらも、人が神になるという宗教があつて、本気で求める人たちがいることにただただ驚いていました。

これが、金光教との出会いです。このようなやりとりを金光教では「取次とりつぎ」と言います。金光教の素晴らしさは、取次による教えです。あらゆる難問、奇問、愚問に、実意に丁寧に答えてくださる先生は、決して裏切らないし、逃げません。そして、岡山弁混じりの教祖様の語り口には、どこことなく懐かしく温かくほっこりするものがある。そんな教祖様の教えを頂けるお広前は、私にとって、とても居心地のいい場所

になりました。乾いたスポンジが水を吸い込むように、教祖様の教えが私の脳髓から浸透し、体の隅々まで行き渡り、心を落ち着かせ、難儀から心を解放してくれました。

ですから、教会へお参りするのが、楽しくなりました。おかげは本当に頂ける。何でも頂ける。「なぜみんなお届けしないのだろう」と思ったことがあります。

初めは、アメリカに滞在して、ちょっと英語を勉強するつもりで、1年分の授業料と生活ができるだけの費用を日本で用意して、渡航しました。1年が過ぎた頃、貯金も底を尽き、帰らなければならなくなりました。すると神様は、仕事を用意してください。奨学金も労働許可も頂く。そうして生活ができるようにしてください

いました。

いかがでしたか？

私たちは、人生の中で様々な出会いがあります。大矢さんは、アメリカという異なる文化、生活の中で金光教に出会いました。

相手を責めるのではなく祈る。どんな人にとでも祈って、神になる稽古をしている。衝撃の出会いでした。

「真一心に神信心しておかげを受け、人を助けて神にならせてもらうがよい」という教えが金光教にあります。人のことを祈ったり、助けたりすることで神になる。

大矢さんは教えに触れて感動し、喜びの生活を見付け、心が大きく変わり、生活も変わって

いきました。

その後、金光教の教師になって、現在アメリカ・カリフォルニア州にある金光教サクラメント教会で奉仕されています。



《先生のおはなし》

「人はみな限りある命を生きる」

愛知県・今池教会 浅野弓

おはようございます。案内役の岩崎弥生です。

今日お聞きいただくのは、愛知県・今池教会、浅野弓さんのお話です。

タイトルは、「人はみな限りある命を生きる」。

佐伯さんという若い女性が、私の教会に参拝してくるようになりました。参拝のたびに仕事上の問題や人間関係などの話を聞かせてもらっていました。そんな中で、彼女のお父さんが、**脊髄小脳変性症**という難病に苦しみながら、

54歳の若さで亡くなったということを聞きまし
た。その病気は、はじめは立てなくなり、次第
に話せなくなり、いよいよ食べられなくなると
いう、ゆっくりとではありながら、確実に全身
の機能がむしばまれていくというものだそうで
す。

ところが、ある日のこと。今度は弟の大輔君
に、その病気の兆候が表れ始めたということ
聞かされました。弟の大輔君は、その時まで二
十代。その彼が、自分の病状をお父さんに重ね
合わせて、どれだけ苦しんでいるかは、想像に
難くありませんでした。

私は、彼女やお母さんが、お父さんのことを
一生懸命に神様に願ってきたことを知っていま
したので、その心中を思うと、「どうしてこん

なつらいことが起こったのだろうか」と、大変
悩み苦しみました。お母さんは、「神様は、ど
んな思おもひ召めしなんでしょうか」と求めてもられ
ます。私は理屈に合わないとは思いますが、
病気が治る奇跡を願いたいと思いました。でも、
私にできることは、「とにかく少しでも病気の
進みが遅くなりやすいように。たとえ限りがある
うとも、彼の人生が豊かなものでありますよう
に」と祈ることだけでした。

病気の進行は、はじめのうちはとてもゆっく
りなので、いろいろな才能に恵まれた大輔君は、
友達とバンドを組んでコンサートを開いたり、
ちぎり絵の展覧会を開いたり、とても精力的に
行動していきました。そうした報告を聞くたび
に、その作品の優しさに感動し、彼が生きてい

る実感を一つずつ確かめようとしていることを
感じました。さらに彼は、一念発起して、言語
聴覚うたかた士の資格を取ることに挑戦しました。
だんだん言葉を失っていったお父さんの姿を重
ね合わせて、言葉が不自由な人々のお役に立
うとしたのです。

そして、次第に病気は進行し、10年足らずで、
ほとんど動くことができなくなりました。

容態が悪くなつてからも、その都度、神様に
お願いしながら難しい山を何度も越えていまし
た。しかし、いよいよかもしれないという日の
夕方、お母さんから電話がありました。「大輔
に話しかけてください。返事はできませんが、
必ず先生の声は聞こえていますから」と言われ
ました。受話器の向こうに大輔君がいるけれど、

もう、彼の声を聴くことはできません。「がんばったね」と言ったほうがいいか、「大丈夫だからね」と言おうかと迷いながら、必死に何かを話しかけたのですが、実は、何を話したか覚えていないのです。

電話を切ってから、「必ず、先生の声は聞こえていますから」と言うお母さんの言葉を思い出して、大輔君はどんな思いで私の声を聞いてくれたのだろうか、ちゃんと大切なことを伝えられたらどうかと、今でもあの時のことを思い出します。

そして、とうとう彼は亡くなりました。大輔君が亡くなってから、彼の書いた小説をお母さんが本になさいました。それは仲間たちとの交流を楽しく描いたもので、大輔君の青春そのも

のの感じがして、「こんなに楽しい時間を仲間たちと持っていたんだね」とうれしくなりました。そして、お父さんの病気のことや、お父さんとの思い出もたくさん書かれていて、それは淡々と描かれている分、余計に、どれだけ彼の中でお父さんが大きな存在だったかを物語っているようでした。お父さんの病気をいつも自分に重ね合わせながら過ごしていたのだと思うと、胸が熱くなります。

金光教では「人はまたとない尊い命を頂いて生まれてくる。その命に長い短いの差はあるけれど、その人の負い持つ役割を務め終えて、人は神様の元に帰っていく」と教えられています。またとない命の、長き短きほどほどに、いえ、短かったからこそ、彼はあんなに一生懸命生き

られたのではないかと、今、私は思っています。

喜びで一日をスタートさせたいですね。

いかがでしたか。

誰も病気になりたくてなる人は、いないですよ。ましてや、お父さんと同じ難病だと知った時、本人も周りの家族もどんな苦しみがあったことでしょうか。けれども、大輔君はその現実を受け入れました。その大輔君に見えた世界は、どんなものだったのでしょうか。悲観するだけではなく、命の限り青春を楽しみ、また、自分と同じ病気だからこそ感じるお父さんの思いを重ね合わせ、一緒に、懸命に生ききったように私には感じられました。

皆、限りある命だからこそ、朝、日が差し込むのを感じて、今日も新しい命を頂けたという



《先生のおはなし》

「誰が為に助ける」

兵庫県・姫路教会
竹部真幸

おはようございます。案内役の大林誠おおばやし まことです。

今日は金光教姫路教会の竹部真幸さんのお話です。タイトルは「誰が為に助ける」。お聞きください。

2011年に起こった東日本大震災は、人を助けるということについて私が真剣に考えるきっかけとなりました。

当時、私は滋賀県で学校の教員をしており、その日は卒業式でした。厚い雲が立ち込めるあいにくの天気でしたが、中庭では卒業生が、友

人、そして恩師との最後の時を過ごす、何とも和やかな柔らかい時間が流れていました。ふと違和感を覚え、神経を集中し、地面の揺れを感じた時には、東北地方に多くの死者と甚大なる被害を出した大災害が起こっていました。

地震発生から1カ月後の2011年4月、東北の地震とは別に、しかし同じくらいショックを受けた出来事がありました。それは私の大切な友人が、自ら命を絶ったという知らせでした。突然の訃報ふほう、最後まで理由も分からぬまま、見送ることとなりました。「なぜ私に相談してくれなかったのか」「助けられる方法はなかったのか」。悔しさがあふれ、涙が止まらず、立ち上がることができないほどでした。今振り返ってみても、私の人生でこれほど涙を流したこと

はありません。

2011年5月、何かに突き動かされるように、私は仲間と共に東北に向かっています。

「困っている人の役に立ちたい。何か自分でもできることをしたい」。そういう思いでボランティアに参加しました。福島では体育館で支援物資の仕分けを、石巻では住居に入り込んだ泥の運び出しのお手伝いをさせていただきました。

ボランティアから戻ると、多くの人が、「ボランティアなんて偉いね」「人のために何かできるなんてすごいね」と言ってくれました。誰かの役に立てたのなら良かったと思う一方で、私の心の中には「何もできなかったんです」と叫びたい気持ちがありました。そして実際に、

何もできなかったのです。大切な人を亡くされた人たち、大切な物を無くされた人たちの前で、かけられる言葉は何もなく、ただ目の前のことを粛々とやる。それが私の精いっぱいでした。

2011年8月、私は再び東北に向かいました。あるお宅で2日間泥をかき出すことになりました。2日続けてということもあり、その家に暮らしておられたおばあさんと世間話のような会話もできるようになりました。ほぼ全ての泥をかき出し、明日は帰る予定であることを告げた時のことです。別れ際に、私は何か伝えたいと思ったのです。頭の中に、「また来ます。それまで頑張ってください」という言葉が浮かびました。しかし、これ以上何を頑張るのでしようか。「また」という言葉が、突然全てを失

った人たちにかける言葉なのかという思いに駆られ、結局何も言えませんでした。そんな時でした。おばあさんは私の側まで来て、「ありがとう、ありがとう」と大粒の涙をこぼしながら、そして私の手を握りながら言ってくれたのです。

「そんな大したことはできていません」、そう言おうとしましたが、口に出たのは「大丈夫ですよ。ありがとうございます」という言葉でした。本当に心が温かくなったと同時に、私の中で何かが変わったのです。「人を助けたい」と思っていた私が「人に助けられた」瞬間でした。

何が「大丈夫」で、何が「ありがとう」ございました「なの」。今、そのことを思い出しなが

ら、私は、「人の身を助けて、わが身助かる」ということを思っています。大切な友人を失い、自分の無力さを責め、それを埋めるようにボランティアで誰かの力になろうとしていた私でしたが、この経験で本当に救われたのは私なのかもしれません。心の底から湧き出るような、本当の「ありがとう」は、今でも私を支えてくれています。

「人を助けよう」と言うと、「そんなきれいごとを」と言われたこともあります。それでも私は、今も困っている人を助けてあげたい、困っている人の役に立ちたいと思っています。それは誰かのためでもあり、自分のためでもあります。そしてそれは、あまねく多くの人々のためになると、私は信じているのです。

いかがでしたか。

大切な友人を失った悲しみに打ちひしがれる竹部さんを救ったのは、被災地のおばあさんの「ありがとう」という言葉だったという。

人に喜んでもらえたら、自分もまたこの上なくうれしくなるものです。それは、人間同士、みんな深いところでつながりあっているからではないでしょうか。

金光教の教祖は、「人はみな神の子である。この世に他人というものはない」と言い、そして、わが子がお互いに助け合って生きていくことを、親である神様は切に願われているのだと教えています。

人を助けると、人も自分も助かる。さらに神

様もお喜びくださって、幸せの輪がさらに大きく広がっていく。そのことを信じて、私も今日を、何か人のお役に立つような一日にしたいと思えます。

《先生のおはなし》

「喜び100個書き出してみた」

神奈川県・横浜西教会 山田信二よこはまにし やまだしんじ

おはようございます。案内役の岩崎弥生いわさきやよいです。

あなたは、どんな時に喜びを感じますか？

今日は、神奈川県・金光教横浜西教会・山田信二さんのお話で、「喜び100個書き出してみた」。

先日、50代の男性から、こんなメールが届きました。

「以前は悪いことが続いて大変でした。今は平和な日々を送ることができていますのですが、これといって良いことがないのです。どうした

らいいでしょうか」

こういう漠然とした悩みを持っている方は多いのではないのでしょうか。不幸とも思わないのだけれど、幸せとも思えない。何かいいことないかなあという感じですよ。

そこで私は次のように返信しました。

「良いことがないですか。では、良いことがあるように神様にお願いしましょう。それと、今ある喜びを一つ一つ見つけ出して、たくさんお礼を言いましょ。たくさん喜ぶ人には、良いことがたくさん起こってきます」

しばらくして、その方からまたメールが来ました。「ありがたいことを100個書き出してみましたが、なるほど良い気分です」というのです。いやあ、びっくりしました。まさか100個書き出

すとは。

その方が書き出した喜びのリストを見せていただきました。どんなことを書き出したか、少し紹介してみましよう。まずは、

○朝、毎日定時に起きられること。

○夜、寝られること。

○服が着られること。

○服が脱げること。

○ご飯が美味しく食べられること。

○毎日風呂に入れること。

○温かい部屋に住めること。

そうですね。ふだん見過ごしがちなこと、たくさんありますよね。

実はこの方は、以前職場でとてもつらい思いをし、病気になって、わらにもすがる気持ちで

金光教の信心を始めたのです。その後、仕事を辞め、健康も回復し、福祉関係の個人事業を始めました。そのことも書いてあります。

○病気が回復したこと。

○資格が取れたこと。

○念願だった個人事業ができること。

○それで暮らしていけるまで事業が軌道に乗ったこと。

いやあ、あのつらかった頃のことを思うと、私もうれしくなってきました。

もちろん個人事業は難しいこともあります。

収入も思うようにはなりません、良いことを見つけたみたいです。例えば、

○自分の仕事に誇りを持てること。

○上司に嫌なことを指示されないこと。

○仕事をとおして世の中で困っている人の役に立てること。

はい、仕事にやりがいを感じておられるんですね。しかも、人の役に立てることが喜びになっっているのが偉いなあと思います。

また、過去を振り返ってもみたようです。

○両親の愛情を受けて育ったこと。

○高校に通えたこと。

○大学に通えたこと。

○本を多く読めたこと。

○多くの友人に恵まれたこと。

なるほど、当たり前と思っていた過去に、喜びが潜んでいるものなんですね。

そして、自宅の周りも見えてみたようです。

○近くに親切で腕の良い医者があること。

○近くに郵便局があること。

確かに便利ですよ。

また、面白いのは、

○近くに天然温泉があること。

○近くに焼き鳥屋があること。

はい、これって、けっこう重要かもしれません！

そして、

○平和な国に生まれたこと。

○自由な国に生まれたこと。

これも大事なことですよね。当たり前じゃないんです。自由と平和は絶対に守らないといけないと私は思います。

とまあ、こんなふうに喜びを見つけていかれたんですね。これは全部ではありません。もっ

といろいろな具体的なことが挙げてありました。中には、他の人には真似のできないこともありですが、ほとんどは、ごく普通の暮らしの中の喜びです。

この方に、「そうやって100個書き出してみても、どんな気持ちですか」と尋ねてみたら、こんな答えが返ってきました。

「私には、まだ3つ叶っていない願いがあります。鋭意努力中です。でも、できていないことはたった3つで、できたこと、神様に与えていただいていることは100を超えます。100対3です。そう思ったら、うれしいというか、何とかなるぞというか、たった3つで悩んでもつまらぬという気持ちになってきました。何しろ100対3なのですから」

そう聞いて私も元気が出てきました。この方も私も金光教の信心をしています。信心するというのは、神様をお願いをして願い事をかなえてもらうことだけではないんです。信心すると、生活の中の見逃しがちな喜びを見つけることができる。そうなると、心の中にはつらいことや、悲しいこともあるのですが、喜びのほろがが大きくなって、つらいことや悲しいことを包んでくれて、生きる力が湧いてくるのです。そうやって喜んでいると、神様も一緒に喜んでくださって、うれしいことが増えていくのだと私は思っています。

さあ、皆さんも喜び100個、書き出してみませんか。

いかがでしたか。

私も喜び100個、書き出してみました。書き始めは、スラスラ書けるのですが、そのうち書く手が止まってしまいました。何か他にないのかなあと思ってみると、ありましたありません。前に叱られてつらかったと思っていたけれど、今は、そのことがとても役に立っているなあとと思うことや、あの出来事、当時は嫌だったけれど、そのおかげで立ち止まって考えてから行動するようになったなあと考えることも見つけられたのです。今はつらいと思ったり、自分の思いどおりでなかったとしても、意外と大きな喜びの種が潜んでいることもあるんですね。

起きてくることはきつと意味のあること。そ

んな視線で物事を見てみたら、これから芽が出て花が咲く喜びの種を見つけれられるかもしれません。

《先生のおはなし》

「『おどおど』を『わくわく』に

「初めてののお菓子作り」

大阪府・大仁教会 岩崎繁之

おはようございます。案内役の大林誠おおばやし まことです。

最近のスーパーは、セルフレジが多くなって
きましたね。私、自分は機械に強いと思ってい
ましたけど、レジの機械でもたまたましている様
子を見て、店員さんがしばしば助けにきてくれ
ます。恥ずかしくて、おどおどしてしまいます。
格好いいおじさんでありたいと思っても、なか
なかそうはいきません。

さて今日は、その「おどおど」についてです。

大阪市にあります金光教大仁教会、岩崎繁之さ

んのお話で、「『おどおど』を『わくわく』に

「初めてののお菓子作り」。

ある日曜日の午後のこと。中学生の娘が、お
菓子作りをしたいと言いました。

何でもユーチューブで動画を見ていて、「自
分も作ってみたい」と思い立ったようです。妻
は買物に出かけており、父親である私に向けて、
「一緒に作ろう」というお誘いです。

——あれっ？ お母さんとじゃなくて、お
父さんとでいいの？

何となく、引っかかるものがありつつの戸
惑い半分、うれしさ半分。

せっかくなので「へー、おもしろそうやん！」
と返事をし、何を作るのか聞いてみます。

娘が作ってみたいのは「ガトーショコラ」。

—— ああつ、どうしよう、言葉からイメージが思い浮かばない……。まあ、娘が作り方を分かっているだろうから、様子を見守るくらいをすればいいだろう。そんなことを思いながら、さっそく取りかかります。

材料はあらかじめ買いそろえていると言うので、段取りを娘に尋ねました。お菓子作りは、「分量と手順が大事」ということくらいは、初心者の中でも知っているのだ。

すると、娘は動画を見ようとタブレットをのぞき込んで、考え込みながらなかなか返事をしてくれません。

—— あれ、いきなり雲行きが怪しいのかな？
少し気を使って、さっきよりもっと言い方を

優しくめに、「材料は何？ どうやって作るの？」

と聞いてみると、その都度動画を見ながらの返答。よく聞いてみると、実は娘にとって初めてのお菓子作りだったのです。

—— あちゃー、見守っているだけだと思っていたけど、あてが外れた。

娘のせっかくのやる気を大切にしたい。でも自分の力量では難しい。そこで、心の中で「神様、ご先祖様……」と祈りつつ、頭の中でどう進めるかフル回転で考えます。

そこで、そういえば……と思い出したのが、以前、職場の先輩から聞いた、「初心者の人になる」というアドバイスでした。

誰でも初めは初心者です。初心者の時って、疑問を言葉にしようとしても、その言葉自体が

思いつきません。それってすごく不安なこと。経験を積んでいくと、うまく言葉で表現ができるようになります。でも、できるようになりたいたともがくことはとても大事なことです。

「初心者の達人になる」とは、初心者の不安な思い、言葉にできなさを大切にする、ということですよ。

じゃあ、このお菓子作りの場面で「初心者の達人になる」ってどうすることだろうかと考えると、ふとテレビの料理番組のことを思い出しました。教える役と聞き役のやり取りです。娘が「メイン」なんだから教える側。そうすると、私は聞く側。何も知らないからこそ興味を強く持っている聞いていこう。

こんなふうに考えがまとまってくると、私の

中に浮かんでいた「おどおど」した不安な気持ち、が、「わくわく」という楽しみな気持ちに変わっていききました。

さて、動画と一緒に見つつ、お菓子作りを進めていきます。娘に向かって、「先生、これはこうしたらいいんでしょうか？ それともこうするほうがよろしいですか？」というように、初心者の私が質問をし、先生である娘に答えを求めます。娘の方も、「それはね、こうするんですよ」と、先生として初心者の私に教えてくださいます。

こんなやり取りを繰り返していると、すっかり先生気分の娘のほうも、「どうしたらいいんだろう」という「おどおど」した気持ちが落ち着いて、鼻歌交じりに楽しそうに作っていきま

す。実は、動画を繰り返し見て、頭の中でのシミュレーションはばっちりだったのです。その時欲しかったのは、まさに自信だったのです。う。

分量と手順をその都度確認して進めていくと、およそ大きな失敗なく「ガトーショコラ」なるものが出来上がりました。初めて作った娘は大満足。ということは、私も立派に聞く役を務めることができたようです。

「うまく出来たから神様とご先祖様にお供えする？」と娘に聞いてみると、「うん、お供えしてくる」との返事です。

—— ありがとうございます。

娘はお菓子が出来たことを、私は初心者の人になるという「思い付き」が差し向けられた

ことについて、一緒にお礼を言ったのです。

ところで、一般的に父親にとって、中学生という思春期の娘とのやりとりには、ちょっとしたことでお互いの気分や関係を崩しかねないスリルとサスペンスがあるように思います。ですから、娘とのやり取りはささいなことのようであり、私には、実はものすごいミッションを達成したことのように思えるのです。

「不安」と「期待」という二人の気持ちに、「祈り」というアクセントをきかせることで、不思議と整っていったように感じたことでした。

さて、後日、娘に以前から気になっていたことを聞いてみました。

「この前のお菓子作りの時、どうしてお母さ

んじゃなくて、お父さんを誘ったの？」

すると、娘は、「お母さんは細かくいろいろ口を出してくるけど、お父さんはテキストだからごちゃごちゃ言わないでしょ」となぜか自信満々に答えられてしまいました。

娘から初心者「したたかさ」を学んだ私でもありました。

いかがでしたか。

「初心者の達人」とは、面白い言葉ですね。知らない、できないというのは、いろんな可能性が宿る「伸びしろ」。私なんか、年と共に果てしなく伸びしろが広がっていきそうですが、岩崎さんのように、「祈り」によって、おどおどをわくわくに変換しながら生きていきたい。

そんなふうに思いました。さあ、今日もわくわくの一日が始まりますよ！



《先生のおはなし》

「入院生活のなかで」

大阪府・島之内教会 しまのうち 三矢田光 みやたひかる

おはようございます。案内役の岩崎弥生です。

よく「人生、山あり谷あり」と言いますよね。

今日は、思いもかけない出来事に翻弄ほんろうされる中、神様と出会い、生き方が大きく変わり、見える世界が変わっていった方のお話です。

大阪府・金光教島之内教会、三矢田光さんのお話で、「入院生活のなかで」。

シヨウイチさんは、親の愛に恵まれないで育ち、人に言えない苦労をしました。そのため、この世で信用できるのはお金だけだと思うよう

になったのです。

そんなシヨウイチさんの人生は、結婚により大きく変わりました。奥さんは一人娘でしたので、シヨウイチさんは養子に入り、義理のお父さんが設立した会社で働くようになります。そして持ち前の営業力を発揮して、会社の業績を大きく伸ばしたのです。子どもも生まれ、幸せな家庭を築きました。お父さんと一緒に金光教の教会に参拝して、青年会で活躍しました。

義理のお父さんが亡くなられた後、シヨウイチさんは社長となり、ますます業績を伸ばしました。けれども、その営業の仕方には、見ええ張ったようなところがあり、生産の現場を大切にしないところがありました。

膀胱ぼうそうがんで半年入院していた間に、部下が会

社の乗っ取りを図り、退院して立て直しをしようとしたのですが、結局会社は倒産してしまします。

焦ったシヨウイチさんは、一獲千金を狙って怪しい事業に手を出し、ことごとく失敗します。シヨウイチさんはますます焦り、ついには警察のご厄介になるようなことをしてしまいます。

罪の償いをして社会復帰したシヨウイチさんは、62歳で、ある会社の平社員として再出発します。落ち着いた暮らしを取り戻してみると、これまでが悔やまれてなりません。先祖をお祭りする祭壇の前で、毎日義理のお父さんにおわびするのですが、いくらおわびしてもおわびが通る気がしないのです。

そんな時、結核にかかって専門の病院に入院

します。シヨウイチさんは思いました。

「教会の先生から、このお道は、人を助けて自分が助かる道だと教えていただいている。何もできないけれど、せめてお医者さんや看護師さんにお礼を言いながら、日々を過ごさせてもらおう」

同じ部屋に入院しているお年寄りがいました。その人は、預金通帳を見せびらかしては、「わしにはこれだけの財産がある」と自慢しました。身内の人がお見舞いに来ても、「財産目当ての見舞いなんぞいらん!」と追い返してしまします。

シヨウイチさんは、その老人を気の毒に思い、教会で先生から聞いたお話を思い出しながら、ぼつぼつと話しかけました。やがてその老人の

気持ちは変わってゆき、家族のお見舞いを受け入れるようになりました。

それからまた、行き倒れた男の人が入院してきました。人を刺すような冷たく鋭い目をしていきます。早く死にたいと言って、お医者さんや看護師さんの手も払いのけてしまい、誰とも口をききません。食事もしようとしません。

シヨウイチさんはその男の人に、少しずつ声をかけていきました。すると、誰とも口をきかないその男の人が、シヨウイチさんにだけは心を許すようになっていったのです。

お医者さんも看護師さんも、その男の人に手当てをする時は、まずシヨウイチさんに頼んで言い含めてもらって、それから手当てをするようになっていきました。そうすれば手当てを受けてく

れるのです。

その人の容体がいよいよ悪くなり、特別な部屋に移されました。

ある日の夜中、看護師さんがシヨウイチさん呼びにきました。その男の人が呼んでいるというのです。

会いに行くと、その男の人は、針金のように細い手をシヨウイチさんに伸ばしました。そして、この痩せ衰えた病人のどこにこんな力があるのだろうかと思うような強い力でシヨウイチさんの手を握り、「ありがとう。ありがとう」と言いました。

そして夜の明ける前に、静かに息を引き取られたのです。

人を呪い、世の中を呪い、自分を呪っていた

男の人が、この世を去る前に最後に残した言葉が、「ありがとう」だったのです。シヨウイチさんは、そのことがありがたくてなりませんでした。

その後シヨウイチさんは無事に退院され、奥さんと心穏やかな晩年を過ごされました。

いかがでしたか。

シヨウイチさんは、結婚して義理のご両親に会うことで、初めて親の愛を知りました。ところが、またつらい出来事に見舞われます。その成り行きの中で、さらに神様に出会っていきましました。

金光教では、神様を「人間、万物を育みお守りくださる親神様」と表現しています。シヨウ

イチさんは、目には見えませんが、どんな時も片時も離れることのない親神様の愛に気付かれていきました。だからこそ、その温かい思いに感謝しながら人と関わっていくシヨウイチさんの思いが、かたくなになった老人の心に染み込んですね。

困っている人を助けたいという温かい気持ち、誰もが生まれた時に神様から頂いて生まれています。けれども、時にその心がしぼんでしまふこともあります。

シヨウイチさんが、親、親神様の温かさに触れ、その心を取り戻したように、冷たく鋭い目をしていた男性さえも「ありがとう」の心を取り戻しました。人は、変わるのだなと強く思わされました。

《先生のおはなし》

「勇気をくれた言葉」

大阪府・吹田教会 近藤加奈美

おはようございます。案内役の大林誠おおばやしまことです。

子育てには、いろんなトラブルがつきもので、病気をしたり、けがをしたり、親としては、ハラハラすることの連続ですね。

今日は、そんな体験をとおして神様のお心に触れることができましたというお話です。大阪府・金光教吹田教会、近藤加奈美さんで、「勇気をくれた言葉」。

長男が小学3年生の冬の時のお話です。

夜、主人とフットサルの練習に行った息子が、

口から血を流し帰ってきました。

話を聞くと、練習が終わり、寒かったので息子は手足をトレーナーの中に入れて、ダルマのような形で椅子に座っていたそうです。そして、バランスを崩してしまい椅子から落ちてしまったのです。子どもには高さのある椅子だったので、地面に手をつくこともできず、顔からそのまま落ちてしまいました。

翌日、総合病院に行き、レントゲンを撮り、診察してもらいましたら、上あごを骨折しているとの診断を受けました。レントゲンを見ると、素人でも分かるくらい、ヒビが入っていました。歯茎もザックリ切れていたのです、すぐに口の中を縫ってもらい、あと少しで縫い終わるといいう時に、麻酔が切れてしまい、廊下に息子の泣き

声が響きました。私は「神様、どうか早く息子の処置が終わりますように」と祈ることしかできませんでした。

どうにか無事に処置が終わり、家に帰って息子に、「学校どうしようか?」と問いかけると、「顔が腫れている間は、学校休む」と息子が答えました。学校を休むと授業についていけず、息子が大変にならないかと思いましたが、顔も腫れて口も開かず、しゃべることもご飯を食べることも難しいので、主人と相談し、1週間学校を休ませることにしました。

息子がけがをして1日、2日と経ち、ご飯も少しずつ食べられようになり、息子にも笑顔が戻り、思っていたよりも早く学校に行けるかなと思い、「明日から学校に行く?」と聞いてみ

ました。しかし、返事は、「まだ行かへん」でした。

私たちは、「早く息子が普段の生活に戻れますように」と神様をお願いをしていましたが、息子の気持ちを一番に考え、休ませることにしました。

次の日の夕方、息子の担任の先生から電話が入りました。「けがはどうですか? まだ学校に来ませんか?」。私が先生に息子が行きたくないと言っていることを伝えると、「今からお家に行ってもいいですか?」と尋ねられました。「構いません」と答えると、すぐに来てくださり、私と息子と先生の3人でしばらく雑談をした後、先生が「本題やねんけど、なんで学校行きたくないん?」と息子に問いかけました。

すると息子は、「顔が腫れて変な顔やから。皆に笑われるから嫌や」と答えました。私は、「やっぱり腫れが引くまでは、学校に行けないか」と思っていると先生が息子に、予想外の言葉をかけました。

「正直に言うな。絶対皆には笑われる。でもな、そんなこと言うてたら、いつまで経っても学校に行かれへん。それなら、明日学校来て、皆を笑わそう！でも、笑うのは朝の1回だけや。その時だけ笑わせて、その後は笑わさない。先生が約束する。笑った人がいたら先生が守る」その言葉に、私も息子もビックリしましたが、先生の本気が息子に届き、あれだけ行きたくないと言っていたのに、「それなら、明日から行こうかな」と前向きになってくれたのです。

次の日、不安そうな顔で登校した息子でしたが、「皆に笑われたけど、先生の言うとおりの後は誰も笑わなかった！」と笑顔で帰ってきました。

息子に「何で先生と話して、行こうと思ったん？」と聞くと、「分からへん。でも何か勇気が出てん」と答えました。私は息子と同じ気持ちだと思いました。私自身、腫れた顔のまま息子が学校に行ったら、嫌な気持ちで帰ってくるかもと心配する気持ちがありました。先生のひとりで無くなったのです。先生の言葉は神様の言葉であり、息子はもちろん、親の心にも響いていました。

神様は息子のことだけではなく、私のこともわが子のように思ってくれています。そんな神

様の思いは、日常生活の中にたくさんあり、今回私たちは先生の口をとおして、背中を押し、勇気を与えてもらいました。

気付くことは難しいですが、いつも見守ってくれていることを忘れずに毎日を過ごしたい。そう思える出来事でした。

いかがでしたか。

近藤さんは、担任の先生の言葉は神様のお言葉だったと言っています。それほどに、子どもさんのことを真剣に祈り続けていたんでしよう。わが子を愛しく思えば思うほど、神様も自分たち親子にどれほど深い愛情を注いでくださっていることかと、祈りの中で思いを深めました。だからこそ、担任の先生の声が、神様の力

強い救いの声として胸に響いたんだろうと思います。

「なぜ学校に行こうと思えたのか分からない」と話す子どもさんに、お母さんはそのあと、「神様があなたを元気付けてくださったのよ」と教えてあげられたんじゃないでしょうか。

いろんな経験をとおして神様のお心を受け止めていく中で、親も子も一步一步、安心の世界に導かれていくんでしょうね。

《先生のおはなし》

「山茶花の咲く頃」

福岡県・苅田教会 深見徳久

おはようございます。案内役の岩崎弥生です。

今日は、受験という特別な日に起きたお話です。福岡県・苅田教会、深見徳久さんのお話で、「山茶花の咲く頃」。

毎年1月になると必ず思い出す出来事があります。私は以前、岡山県の金光教本部の近くにある、金光学園高等学校で教員をしていました。ある日、大学入試の受験生の引率で受験会場に行った時のことあります。

受験の日の朝、会場の入口付近で受験生がや

って来るのを待っていた時、数人の生徒が駆け寄ってきて、「先生大変です。A子ちゃんが車にはねられだけがをしました」。大粒の涙を流しながら報告してくれました。

私はすぐさま事故現場に向かいました。着いてみると、乗用車が歩道に乗り上げ、車のボンネットはめくれ上がり、そばの自動販売機は傾き、街路樹の傍らに植えられていた山茶花はなぎ倒されて、その花びらが無残に路上に散っていました。乗用車がカーブを曲がりきれず歩道に突っ込み、たまたまそこを歩いていたA子さんは、車と自動販売機の間で挟まれたのです。

A子さんは数力所の骨折と、内臓損傷という重傷を負いましたが、幸いにも一命は取り留めました。入院数週間ののちには追試験を受けら

れるまでに回復し、医師と看護師が付添い、受験に行きました。しかし、万全の体調で受験できなかつたため、その年の合格通知は彼女の元には届きませんでした。

同級生らは卒業したのちにも金光教本部に参拝し、A子さんの回復を願っていました。その姿を何度も見かけ、人の心の優しさや温かさを感じ、それぞれの心の中におられる神様が、人間の助かりを願う姿となって現れたのだと思わせていただきました。

A子さんは多くの人たちに祈られながら順調に回復し、次の年には無事大学に合格しました。

A子さんが卒業してから数年後、偶然に会う機会があり、「ありがとうございます。何とか元気にしています。今でもお世話になった多くの

人に感謝しています」と話してくれ、体も心も元気になった姿を見て、救われた気がしました。

私は事故のあとしばらくは、神様は人間に対してなぜこのようなむごいことをされるのか、神様が信じられなくなりました。金光教の教祖は、「信心せよ。信心とはわが心が神に向かうのを信心という」と教えてくださっています。私は意を決して金光教本部に日参し、改めて信心をし直そうと、自分が納得するまで心を神様に向ける稽古をし、信心の先輩から、神様と人との関係を中心に、いろんなお話を聞かせていただきました。

このような取り組みを続けているうちに、難儀にしか思えなかつた今回のことが、実はおかげの中の出来事であつたと分かるようになって

きました。たとえどのような難儀なことが起こってきても、神様は常に人をお守りくださっており、難儀をとおして「どうか助かってくれ」と、人が真に助かることを願い続けておられることが分かってきました。

あれから約40年、私はA子さんの健康と活躍を、今も神様にお願ひさせていただいています。現在私がご用させていただいている教会においても、高校や大学の合格祈願に来られる参拝者がいますが、その時には必ず次のようなお話をさせていただいています。

「神様に今日まで生かされて生きていることにお礼申し上げ、惜しみなく愛情を注ぎ、育ててくださったご両親に感謝しましょう。あなたが希望のところに合格したいという思いはよく

分かりますが、合格することをいくら願っても必ず合格できるとは限りません。それよりは、今まで勉強し、身に付けた力が、試験当日十分に発揮できるようにお願いすることです。そして何よりも病気になったり、事故に遭ったりすることなく、無事に受験ができることを神様にお願いしなさい。良い結果が出ることを祈らせていただきます」

A子さんの事故をとおして教えられたことを元に、このようなお話をさせていただいています。

生きていればいろいろな心配事や、まさかといった出来事が起きてきます。事が起きてから慌てるのではなく、常日頃から心を神様に向けて稽古をし、神様におすがりしておれば、必ず

助かる道が開けてきます。

いかがでしたか。

「受験」というと、つい合否のことばかりが気になってしまいます。けれども、受験会場のすぐ近くまで来ているのに、思いがけない事故に遭うこともある。ここまで勉強ができ、受験ができることがまずは尊いこと、当たり前ではないことを改めて思わされました。Aさんが、まずは命を助けられ、1年遅れではありませんが、大学に進学されたとのこと、本当によかったです。

思いがけない出来事に遭遇した時、「なぜこんなことが。どうして」という問いへの答えは、なかなか見つからないのかもしれないし、年

月をかけて考えないと分からないこともありません。それでも、きつと意味のあることだと事実を受け入れ、今できることをやってみるその姿勢が、神様に心に向けるということなのかと思います。そして、Aさんを思う多くの人の祈りがその後押しになっているのだと思いました。

《信心ライブ》

「私の『性格改造計画』進行中」

おはようございます。今日は、新潟県・直江津教会の中西美由祈さんが、令和2年1月25日、金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

私は、小学校中学校と学校を休みがちで、一般的には「不登校」と言いますが、そういう時期を過ごしました。「なぜ学校に通えなかったのか」といいますと、仲の良い友達がいまして、その子の家庭環境の悩みを聞いているうちに、どんどんどんどん私自身が苦しくなっていきました。そして、朝、学校の支度をしていると頭

痛が起きたり、腹痛になったりして、行けなくなってしまいました。

「こんな私は、もうこの世から消えてしまっただろうがいいな」とまで思い、毎晩、神様に「明日の朝、目が覚めませんように…」と、本気でお願いして眠りにつくのですが、必ず次の日、朝、目が覚めるんですね。今思えば、「何てご無礼なことをお願いしていたんだろう」と思うのですが、当時の私は、本気でお願いをしました。朝、目が覚めると、絶望的というか、「何で目が覚めるんだろう」と。こんな感じで、暗い時期を過ごしました。

中学3年生の時に、進路を決めなくてはいけない時期になりました、学校に通えていないということもあり、学力は本当に低く、私立のほ

うも受験するように勧められました。その勧め
てくださった高校は、女子高で、家庭科の被服
コースがあるのですが、先生はそこをしきりに
私に勧めました。私は、学校に通えていません
でしたが、家庭科と美術はすごく好きで、成績
もそこだけは良かったんです。小学生の頃から、
手先を使って何かを作るということが得意で、
先生からは、「この学校に行くしかない。お前
にはここが合ってるんだ」とまで言われました。

そして、受験の日が来ました。高校まで送っ
てもらい、受験をしました。

そして後日、中学校のほうに合格通知が届き
ました。すごくうれしかったですね。「こんな
私でも合格できたんだ」という喜びでした。担
任の先生も、とても喜んでくださいました。

中学3年生の春休みといえば、高校入学まで
が長いんですけども、「私、この機会に変わ
れる」と強く思いまして、私はそれを「性格改
造計画」と名付けました。「性格改造計画で、
今までの弱い自分を変えたい。生まれ変わるん
だ」ということを強く願いまして、それで、そ
れまでの自分だったら絶対しなかったというこ
とを、「むしろやろう。進んでやっというこ
う」というふうに意識しました。

確か合格発表の次の日だったか、その日だっ
たか、まず髪を切りに行きました。それまで外
見とかを意識をしたことがなかったので、眉毛
を整えるということもなく、父からもらった太
い眉毛を、その時に一緒に整えた記憶がありま
す。そんな感じで、見た目から思い切って変わ

って、「中学生までの自分とは違うんだ」というふうに、外から生まれ変わるスタートを切りました。

その頃、父から、「天と地の間に住む人間は、神様の懐に包まれているんだよ。だから、どこにいても、神様が守ってくくださるからね」という話をよく聞いておりました。それまでもきつといういろいろ神様の話をしてくれていたとは思いますが、この時初めて、神様の温かさを感じることができたように思います。それまでの私は、人の目が気になって、お買い物にも一人で行きませんでした。それでも勇気を出して、一人で買い物に行ってみることにしたんです。一歩家を出ますと、案外平気で、人の目なんか気にすることもなく歩くことができました。その

道の上を歩いていると、自然と神様の上を歩かせてもらっているという気持ちになり、空を見上げると、神様に包まれていると感じました。

それまでとは全く別の、キラキラした街の景色でした。今でもその時のことを覚えています。そして高校で出会った友人とは、いまだに連絡を取り合っている仲です。一生の友にも出会うことができました。

神様は無駄事はなされないとよく言いますが、まさにそうだなと思います。不登校を経験したからこそ、今のこの私が作られているんだなど。まだまだ足りないところはあるんですけども、今、私はとっても幸せな毎日を送っております。

何歳になっても、人は、刻々と生まれ変わっ

ています。ですから、またここからですね、昨日より今日、今日より明日と、神様に心を向けながら、より良く生まれ変わっていきたい。まだまだ性格改造計画実行中だな、というふうに思っております。

いかがでしたか。

「不登校を経験したからこそ、今の自分が作られている。幸せな毎日を送ることができている」という中西さん。小学校、中学校の頃の苦しかった時も、高校での新しい生活に向けて胸を膨らませている時も、ずっと神様に守られ続けてきたんですね。

そして今、中西さんは、3人の男の子のお母さんとして、子育ての喜怒哀楽を味わいながら、

「昨日より今日、今日より明日へ。より良く生まれ変わっていきたい」と、奮闘の日々を送っておられるそうですよ。

さあ、私たちも、明日に向かって、今日を素敵な一日にしていきましょう。

《私からのメッセージ》

「失敗しても大丈夫」

静岡県・静岡教会 しずおか 岩崎弥生 いわさきやよい

皆さん、おはようございます。金光教静岡教会の岩崎弥生です。今日は「私からのメッセージ」ということで、私の子どものお話にお付き合いたいと思います。

私は、生まれた時から体が弱く、食も細かったので、平均体重、平均身長から、10キロ、10センチ小さかったと母から聞かされております。どこか悪い所があるのかと母が心配して、あちこちの病院で検査してもらったそうです。ところが、どこも悪い所は見当たらず、いわゆる虚弱ということなんだろうと今は思います。

ですので、よく風邪を引いたり、おなかを壊したりして学校を休みました。そんなに体は弱いのに、気だけは強く、学校へ行けばよく男の子とけんかをしていたのを思い出します。

両親は、私の体が弱いのを心配して、中高一貫校への進学を勧め、小学校の時、初めて受験をしました。結果は、不合格でした。その頃、学校を休んでいる間、本だけは好きでよく読んでいましたが、勉強は嫌いで、算数は特に嫌いで、分かりませんでした。ですので、今考えてみれば不合格は当たり前なのですが、落ちてしまった恥ずかしさをもって、学区の公立中学に入学しました。

その中学は、公立校でありながら、当時としては珍しくとても自由な校風で、自主自立を目

指していました。先生に対しても友達にも、自分の意見をはっきり言う空気がありました。私は当時、気は強くても、引っ込み思案でしたので、女の子同士でも自分の意見を言い合う姿に圧倒され、カルチャーショックを受けました。

その荒療治が効いたのか、私はそこから大きく性格が変わり、というか本来の自分が出せるようになりました。そうになると、私の中の何かが変わり、食事も、何でもしつかり頂けるようになりました。2学期までに身長が13センチも伸び、制服を買い直したほどでした。勉強のことも、学校を休むことが少なくなっただけで、分かるようになり、あんなに嫌いだった数学が好きになれたのです。一つ教科が好きになると、学ぶことが楽しくなり、休み時間も質問に答え

てくれる先生や向上心のある友達に恵まれ、中学の時は本当によく勉強したと思います。

いよいよ高校受験。自分も周りも絶対に合格すると思っていたのに、結果は不合格でした。毎日、泣いて暮らしました。行きたくない学校に、一番着たくない制服を着て行くことが苦痛でしかありませんでした。けれども、そこでまた、思いがけない出会いがあるのです。私のクラスは全員、第1志望不合格者でした。それぞれに痛みを抱えての入学でしたが、そのつらい、苦しい、悔しい気持ちを皆で共有し合いながら、3年間を共に過ごしました。今会っても、受験を共に戦ってきた同志のような関係です。そして私は、その高校でもそんな私たちを受け止め、自分の人生をかけて指導してくださる先生に出

会うのです。その先生は、損得抜きで、生活全てを私たちの次なる目標の大学受験に向けて、3年間を費やしてくれました。恩師というのは、こういう先生を指すのだろうと思います。本当に私には掛け替えのない先生でした。

そして、大学受験。いずれも希望校は不合格でした。頑張っても頑張っても抜けられないトネルの中にいるようでした。が、ここまで不合格が続くと、いくら鈍感な私でも何か意味があるように思えてきました。現実を受け入れることができたからなのか、その後は、大学の時にアルバイトでテレビに出たりして、思いがけない楽しい経験をしましたし、就職は、希望通りの会社に入社することができました。

あれから40年近くの年月が過ぎました。今、

私は、金光教の教師にならせていただき、いろいろな悩みを抱えた方と接するようになり、これまでの通ってきたことに意味があったと思っています。願いどおりではありませんでしたが、全ての経験があつてこそ今の自分があると思っています。そんなふうに私が思えるようになったのは、神様との出会いがあつたからなんです。高校受験の失敗から、私は行き場をなくし、助けを求めています。そんな私に、教会の先生や奥様が、自分が与えられた中で、人と比べることなく、今自分にできることを精一杯、丁寧にやることの大切さをお話ししてくださり、私にいろいろな体験の場を与え、導いてくださいました。そして、私がかくじけずに頑張れたり、どこへ行つても、最高の出会いがあつたことは、

神様のお働き、教会の先生や、両親の祈りがあればこそだと分かったのです。

ですから、今、私が皆さんにメッセージとして言えることは、「失敗しても大丈夫」ということです。何度でもやり直しができるし、しかも自分の思いどおりでなかったとしても、そこに意味があるんです。その意味が分かるには、時間がかかるかもしれませんが、今、私を感じているのは、これまでのいろいろなことは、もはや失敗ではないと言えることなんです。

神様との出会いがあり、そのように祈られる一方だった私が、今度は祈り、支える側にもならせていただきました。つらい時、抱えきれない悲しみがある時、困っている時、「助けて」と言っ

のは、決して弱いからとか、負け犬とかいうことはありません。「助けて」と言えることこそ、生きる力だと私は思うのです。また、本当に困って助けてほしい時、その声を上げられないこともあるかもしれません。そんな困っている人、助けが欲しい人に気が付き、私がそうしていたように、そばで一緒に歩いていきたいと思っています。

《もう一度聞きたいあの話》

『「ありがとう」 っていいね』

(平成 17 年 4 月放送「こころの散歩道」より)

「お父さん、ありがとう」。ある日小学校 3 年になる息子と一緒にお風呂に入っていると、突然言ってきた。「えーっ、どうしたの?」と聞くと、「えへへ、ちよつと言ってみただけ」と言う。そこで、「お父さんのほうこそ、ありがとう」と言い返す。すると息子が、「やっぱり、ありがとうっていいね」と言う。何のことかさっぱり分からないので、詳しく事情を聞いてみた。すると、次のように話してくれた。

学校にいくつかの標語が掲げてあり、その中に「ありがとう 言って言われて 心が通う」

というのがあること。息子はその標語が一番好きだということ。さらに、今お風呂で言ってみたらお父さんも言い返してくれて気持ち良くなつたこと。私は息子の話を聞いて驚いた。というのも私がいた頃にも同じ標語が掲げてあった。子どもたちは私が卒業した同じ学校に通っている。とはいえ、30 年近くもよく残っていたなあと感心した。

そして、実は「ありがとう 言って言われて 心が通う」という標語は、私も好きな言葉だったのだ。

*

数年前、妻に頼まれて野菜を買いに出掛けた。普段は妻に任せつきりなので久しぶりの買い物だ。近所の八百屋さんで、「おばちゃん、大根

1本となすびとピーマン」とお願いした。「はい、毎度あり。ありがとさん」。私は「ありがとう」と言って野菜を受け取ろうとすると、おばちゃんが不思議そうな顔で、「あんた、気持ちいい人やねー」と言う。「今どきの若い人はありがとなんてめったに言わないよ」。「そうかな。だって売ってもらってありがとでしよう」。「うちも買ってもらってありがとやね、あはは」とお互いに心が通じたような気持ちになり、買い物を終えて帰った。その時、私の心に小学校の時によく目にしていた標語、「ありがとう」と言われて心が通う」が浮かんできた。それからは「ありがとう」という言葉を大切にしていこうと強く思ったのだ。

*

妻は、参拝している教会で先生から、「一日にありがとうをせめて100回は言えるようになりましょうね」と言われたそうだ。お世話になっているもの一つひとつ丁寧にお礼が言えればすぐに100回になるのだろうか、なかなかそうもできないのが現実。そこで妻は親子で取り組むいいチャンスだと思い、色紙とペン、はさみを用意し、子どもたちに手渡した。子どもたちは何をやるのかと、ちよつとワクワクしている。一日に100回、家の中でお世話になっているものにお礼を言うことを子どもたちに話し、色紙を短冊状に切り、そこにペンで「ありがとう」と書いてセロテープで貼っていくことを伝えた。「分かった!」と、子どもたちはやる気満々。長男

は小学生なので字をいくらか速く書けるが、年長組の長女は慣れない手つきで一生懸命書いていた。

妻は二人に、「急いで書かなくてもいいよ。

心を込めて書こうね」と言葉を掛け、二人はひたすら「ありがとう」と100枚書き続けた。出来上がると次は、ありがとう探し。日頃お世話になっているものを皆で探す。自分たちなりに次々と見付けていくが、見付けにくくなった時には、妻がちよつとヒントを与えて：100カ所、家の中のあらゆる所、いろいろなものに「ありがとう」の色紙を貼った。

仕事から帰ってきた私は、家の中の様子にしばしあ然とした。しかし、妻から理由を聞き、とてもうれしくなった。長男は、「お父さん、

水や空気にも『ありがとう』を貼りたいけど貼れないんだ」と少し残念そうに言う。「そうか、でも貼れなかったものにも『ありがとう』を忘れないようにしようね」と話した。

*

それからの数週間はものを使うたびに「ありがとう」という声が、家のあちこちからよく聞こえていたが、続けるということは大人も子どももなかなか難しい。けれども、「ありがとう」の言葉が出るようになって、家庭の雰囲気がとても良くなった。

*

夜遅く仕事から帰ってきた。子どもたちもすでに寝ている時間だ。音をなるべく立てないように部屋に入ると、隣の部屋から子どもの寝息

が聞こえる。明かりのスイッチを押すと、そこには「ありがとう」の色紙が。「ありがとう」と小さな声でささやいてみる。ちよつと疲れが吹き飛ぶようだ。お風呂に入り、湯船につかっていると湿気でふやけた色紙がシャワーや石けん台、シャンプーや蛇口に辛うじてついている。「ありがとう」と言ってみる。さらに疲れが吹き飛んでいく気がする。「ありがとう」の返事はなく一方通行のようだけど、『ありがとう』と言って言われて 心が通う』のようにお世話になっているものとも心が通い合う気がしてくるから不思議だ。

「今日も一日ありがとう、おやすみなさい」

★ありがとう!★



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

放送センターHP
「ここで聴く
おはなし」



「ここで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。